9．建築物

9－1．家の建て方

9－1－1．敷地の選定

道路から下（道路をまたいで向こう側）、家の戸口が向いている、低地の方向（即ち西側）をオウトゥンネ o'utunneといい、その方角には、家は建てるものではない。従って、家を建て替えるときでも、古い家の戸口の向いている方、即ち道路の向こう側に家を建てることはなかった。馬小屋かトイレだけをオウトゥンネに建てた。

［鵡川汐見、新井田セイノ氏］

わしの家も昔はトイレは道路の向こう側だった。

［鵡川汐見、新井田キク氏］

お墓の位置はそれほど決まっていなかったが(一箇所に集められていなかった)、昔は墓はオウトゥンネの側にあった。死人は絶対にオロンネ oronne（家の上手で東の方）に置いては駄目だ。イヌ、ネコの死体でも駄目だ。家の並ぶ部落の道路から西側の方に墓場を作って適当に埋めたのではないか。

［鵡川汐見、新井田セイノ氏］

家（チセ cise）はオロンネ側に建てた。玄関あたりから上手がオロンネだ。屋内では炉から上手がオロンネになる。家の方位はここではみな同じで、ロルンプラィがいわゆる東向き（実は北東）でイトムンプラィが南向き（実は東南）である。

［鵡川汐見、新井田セイノ、新井田キク氏］

9－1－2．建築

柱（イクシペ ikuspe）は、地面に穴を掘って刺す。材木は何を使ったか聞いていない。

屋根のことはチセキタィ cise kitayという。プー pu（高床式倉）くらいなら屋根をあげられるが、家の屋根を別に作って後から載せることはしない。屋根は茅（カヤ）でふく。家の屋根をふくときは、部落の人（親戚）が茅（キー ki）を取りに行く。屋根のふき方には段葺きと本葺きがある。茅を葺く前に、アプッキ aputki「すだれ」を敷いて茅が下がらないようにする。段葺きは誰でもできるが、本葺きは決まった人しかできないものだった。

［鵡川汐見、新井田セイノ氏］

屋根は段葺きであった。本葺きは、内地から来た和人が伝えたものだ。

［鵡川汐見、稲葉徳一氏］

軒はノキ nokiという。柱はイクスペ ikuspe、梁はイテメニ itemeni、壁、屋根ともに横棒はサクマ sakumaという。

天井のことはチセ　コトロ　cise kotorという。

壁をチセ　トゥマム cise tumamという。寒いときには、壁にチタルペ citarpe（ござ）を張った。ござの大きいものはヤットゥィ yattuyという。

床にはヨシで編んだ「すだれ」を敷き詰める。その上にコクワかブドウの蔓を伸ばして置き、ピンのようなもので押え止める。何か行事があるときは、更にチタルペ citarpeを敷く。

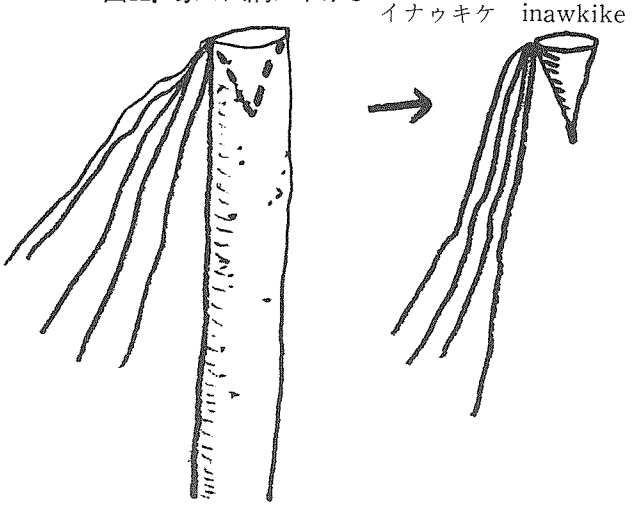
［鵡川汐見、稲葉徳一、新井田セイノ、新井田キク氏］

9－1－3．建前の儀礼

家が出来上がると、建前の儀礼、魂入れを行う。炉をこしらえ、初めて火を起こす。初めての火は、よそからは持って来ずにその家でおこす。火の起こし方は、自分はみた事はないが、石で火花を出して、樺の木に移したそうだ。薪は何を使っても良かったが、柏の木がほとんどだった。

弓矢を作って、家の魂入れの儀式を行った。それは家の主人（建築主）が行う。その人がまだ若ければよそから年寄りを頼んだ。キケを4、5本掻いて切取り、そのイナゥキケ inawkike「削りかけ」を家の4隅の天井隅の壁に刺し、主人が炉の上手（アペ　エトク ape　etok）に座って、カムィノミ kamuynomi をして、新しい家に移った事を知らせてから、矢を3回射た。1回目は神窓に向かって左上隅、2回目は同じく右上隅、3回目は神窓と反対側の上方、煙出し（リクンプライ rikunpuray）の下方あたりをめがけて射る。矢を射ると、現在のような天井も何もないから、屋根裏の茅に矢が刺さる。矢はチセコルカムィ cisekorkamuy「家の神」がいる屋根裏に射る。矢は刺さったままにして置く。これが済んでから親戚などが集まって飲食する。

図12．家の四隅に下げる



この儀式は、その家に入っている人が火事などにあわないように守って下さいという意味でやるのではないか。

家が火事になるときがある。火事をチセ　ウフィ cise uhuyという（ウフィ uhuyは「燃える」という意味）。どこそこの家が燃えているぞ（ウフィ　ナ　uhuy　na）と知らせる。

家を建てて魂を入れる（チセカムィ　ラマッコレ cise kamuy ramatkore）事をしないのは、馬小屋位なものだ。

［鵡川汐見、新井田セイノ氏］

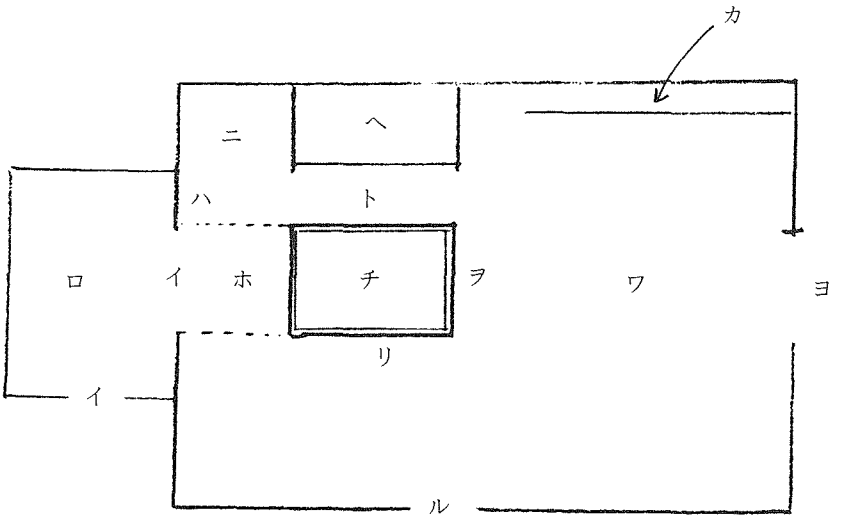
サンペは胸の事。チセ　カムィ cise kamuy「家の神」にラマッコレ ramatkore「魂入れ」する。

［鵡川汐見、新井田キク氏］

9－2．家屋の内部構造

9－2－1．屋内の配置

図13．チン・コタン屋内配置



チン・コタンの家屋

家は神窓が南東に向くように立てる。

屋根裏の両端の頂点（切妻の両端）は、開いていて、煙だしになっている。それをソラマント soramanto といった。

イ　戸口をアパ apaという。

ロ　物置は、セモロ semorという。キネやウスはここに置いておく。薪も置いてある。雨が降っているときには、この中で米つきをした。入口の風よけにもなる。

洗濯はセモル semor側のところでやった。セモルは広く、薪などが積んである。中の土間で洗濯をした。洗濯の汚水は便所の裏に捨てた。

洗濯は、八升樽を使ってした。

ハ　物置から屋内への入り口をアパ apaという。家の中から見て入口の右上（吉村フユ子氏は、左上という）の壁に「戸口の神」アパ　コロ　カムィ apa kor kamuyのイナゥが刺してある。ここにもイナゥが溜っている。この位置は自分の頭より上にはしない。

［鵡川汐見、新井田セイノ氏］

ニ　ウサルというか、との問いに分からないとの答えがあった。

ホ　「庭」。ここの炉のすぐそばの土を掘って、箱を埋め、室（むろ）とした。

炉の下手寄りをアペケシ apekesという（？）。

ヘ　セッ setは、夫婦の寝間のこと。（トゥンプとは言わない）

ト　シソ siso。上手に夫が、下手に妻が座る。

チ　炉（アペオィ apeoy）周りには4本の炉縁木（イヌムベ inumpe）がある。

家によっては、炉縁木が戸口まで延びていることもある（破線で示す）。また、家によっては、戸口側の炉縁木のない家もあった。寒いときには炉縁木に腰掛けて、足を炉の中に入れた。しかし、「よい家」では、炉に足を入れると叱られた。

リ　ハリキソ harkiso女の子が座る。

ル　イトムンプライ itomunpurayとか単にプライ purayと呼ぶ。南に向いており、窓には「むしろ」がかけてあり、外が明るくなったら、それを巻き上げる。この窓は死んだ人の魂が通る道で、イチャルパのお膳の出し入れもする（死体は玄関から出す）。

イトムンプライ itomunpuray（横壁窓）は仏さんの魂が通る窓。

人が死んだときは玄関から出す。壁を壊すことはない。

イトムンプライはイチャルパ icarpa「先祖供養」のお膳の出し入れ以外は使わない。アプッキ aputki「すだれ」をつけ、天気の良いときは開け、寒いときは閉める。

イトムンプライからイチャルパ icarpaの道具を出し入れした。ロルンプライ rorunpuray（上座の神窓）は男の使う窓。イトムンプライは女の使う窓。

子供が窓から出入りすることはご法度だった。神様の通り道を粗末にするな、と叱られた。

ヲ　アペエトク apeetok。息子が座る。

炉の上座はロッタ rottaという。ここは出産後日の浅い女は歩けない。普段は歩いても構わない。（稲葉徳一、新井田キク氏）

ワ　ここで子ども達が寝る。

カ　シントコ　セッ sintoko　set。一段高くなってシントコ「行器」が並んでいる。この上の壁に刀掛けがある。また家の隅（神窓の左隅、即ち北東隅）にあたる所に、「家の神」であるチセ　コロ　カムィ cise kor kamuyのイナゥが置いてある。このイナゥは正月のカムイノミのとき年に1回立てる。古いものもあって溜っている。このイナゥの下にシントコを置き、幾つか並んでいる。

ヨ　神窓（ロルンプライ rorunpuray）。東を向いている。カムィノミする時、必ず開けておく。神が出入りする入口だからまたいだりしない。ここの家では東向きに決まっていた。その方向は磁石では真東ではなく南東である。

一番上座の窓。ヌサにイナゥを立てて御神酒をあげるとき、その酒をこの窓からこぼす。（稲葉徳一、新井田キク氏）

家の隅で料理をし、飲み水の樽と、汚水を捨てる樽の2つがあった。汚水は下座の窓（オウトゥンネ　プライ o'utunne　puray）から捨てることもあった。

［鵡川汐見、稲葉徳一氏、新井田セイノ氏、新井田キク氏］

穂別の家屋

近くの沢から水を汲んで来ていたが、後に井戸(シムブィ simpuy)を掘り、ポンプになった。

道路は、川なりに（川に沿って）あり、家（チセ cise）の戸口は、アパ apaといい、道路に面していた。その戸口の右の柱に神様のためにイナゥが差してあった。戸口を入ると、土間になっていたが、家に続く納屋（セム sem）はなく、外に簡単な独立の納屋をこしらえた。森本家は家の壁も屋根も当時はカヤ葺きで、床は板敷で部屋は2つだった。

土間から見て左手に小さな6畳くらいの年寄り夫婦の寝る部屋(セッ set)があった。それ以外は一部屋で中央に炉があった。炉縁木をイヌムベ inumpeという。灰をウーナ unaという。その炉の右座をシーソ síso、左座をハリキソ harkisoという。この左座に窓があった。右座の横座（上座に同じ）寄りに主人が座り、奥さんはその下手に座った。主人の座るところに女が座るものではない。横座(上手即ち土間と反対の方の座)をロッタ rottaという。この横座にある神窓はロルンプライ rorunpurayという。クマを預かると、この窓から出し入れした。シントコ等はなかったが刀はあった。2人寝る部屋（奥の座敷）の奥に熊送りをする時の刀が二本掛けてあった。

アペサムタ ロク ape sam ta rokしれ「火のそばに座れ」、と客に言う。アペサムタ アペクル ape sam ta apekurせ「火のそばで火にあたれ」と客に言う。

炉の中の横座側の両わきにイナゥケ inawke(イナゥ削り)に使う丸太が差してあった。これは、家の年寄り夫婦の一方が死ぬとそれを一本引き抜いたという。

ロルンプライラの外の一間くらい離れた所に、イナゥチパ inaw cipa「祭壇」（ヌサ nusaともいう）がある。そこでは、毎年、正月と盆にカムィノミ kamuynomiをした。死んだ人のためにイナゥを立ててイチャラパ icarpa（先祖供養）した。熊送りは、神窓と祭壇の間で行われる。

糠（ムル mur）は、祭壇（イナゥチパ）に捨てろと言われた。

炊事（スケ suke）は、女の仕事で炊くのは炉でしたが、料理は流しでした。

流しの周囲にあるもの（流しは土間の奥にある）

水桶 ワクカ オンタロ wakka ontaro

棚 サン san

鍋鈎 スワッ suwat

［穂別富内、森本八重氏］

9－2－2．炉とその周辺

炉の上手にアペ パスィ apepasuy「火箸」が置いてある。下手には、アペ キライ ape kiray「火櫛」が置いてある。

炉の上手の両隅に丸太を打ち込んだ台がある。これはオクカィ サパ okkay sapa「男の頭」

と呼ばれるもので、父の頭と同じだから、釘を打ったり、金槌で叩いてはいけないと言われた。

［鵡川汐見、新井田セイノ氏］

炉棚は、トゥナ tunaといい、オニガヤの簾（すだれ）の上に当時の主食であった稗（ピアパ piapa）や粟（ムンチロ munciro）を穂のついたまま載せて乾燥した。後で、杵と臼でついて食べた（3－3－3参照）。

［鵡川汐見、稲葉徳一氏、新井田キク氏］

明りはスム sum（油）を小皿（三平皿）に入れ、古布や古綿を縄になって芯にしたラッチャク ratcakuだった。その次に出たのが手ランプでほやが無い。そのあとにほやのついたランプになった。石油を買ってきて使った。石油をこぼすと盲目の母に「石油をこぼしたな。臭うぞ。」としかられた。

［鵡川汐見、新井田セイノ氏］

9－2－3．火の神

炉をアペオィ apeoyという。

カムィノミ kamuynomiの時に、女はチカルカルペ cikarkarpe（刺繍の入った晴れ着）を着て、酒を作り、お椀に酒を注ぐ。唱え事は男のみがする。

女は、イチャルパ icarpa（先祖供養）の時に、お膳をもって「誰それの家から誰それへ食べ物を届けます」と火の神に言ってから、外に出て食べ物をまき散らす。イチャルパの時に燃やすイナゥ inawは、チェホロカケプ cehorkakepという種類のイナゥ（柳の木を逆さにして削ったもので3段に削りかけを立てる）である（6－5－7参照）。

カムィノミの時、炉の隅にチェホロカケプと呼ばれるイナゥを火の近くに立てて、「あなたは、山の神、あなたは海の神」とカムィノミを司る者が指図する。火の神へは、アペフチape huciとかアペカムィ ape kamuyと呼びかける。女は火の神をフチカムィ hucikamuyということもある。

カムィノミが終わるとお膳の上に置いてあったチェホロカケプを焼く。

［鵡川汐見、稲葉徳一氏、新井田キク氏］

正月のカムィノミの時、炉の隅（神窓側の左隅）にアペフチイナゥ ape huci inawを立てる。以前の古いのは捨てないで、表から出してイナゥチパ inaw cipaの下手（東側）に立てておく。ここに古いイナゥが溜る。ここは神様のお墓だからここに置く。古い家ほどたくさんイナゥが溜ると母から聞いた（10－1－1参照）。

［鵡川汐見、新井田セイノ氏］

鍋の汁や、やかんのお湯を絶対に火の上にこぼしてはいけないといわれた。火の神を驚かすことになるからだ。

炉のゴミをムン munという。

灰はウナ unaという。灰を捨てる時は、小便のかけられないような畑の隅に捨てた（灰を捨てるときに「オロンネ（神窓の方向）さ捨てろ」といわれた［吉村フユ子氏］）。灰をならす道

具をアペ　キライ ape kirayという。これは、火の神の髪を櫛削るものだといわれていた。

［鵡川汐見、新井田セイノ氏］

火の神　アペフチ　カムィ　apehuci kamuy。姑は火の神を敬っていた。嫁に来てから、炉に向けて足を伸ばしていたら、「女のくせに足をのばしたら駄目だ」と姑に叱られた（6－2参照）。粗末にしたら罰があたる。あく（灰、ウナ una）をあちらこちらに捨てたらだめだと言われた。イナゥチパの近くに捨てる。

［穂別、森本八重氏］

9－3．屋敷の構造

チン・コタンの屋外構造

オロンネ oronne（神窓の方）には洗濯物も干せない。

目の見えない人が家から道路を渡って取り付けた針金を伝わってトイレに行ったのを見たことがある。

トイレは砂利道の道路を挟んで向こう側にあった。トイレは、悪い神様のいるところだから長くいるものではないと教えられた。凶作の時、砂利背負いの仕事が来て、皆その仕事をしたものだった。

家のオロンネ oronne「上座側の方」は汚くしない。プー pu「倉」のあるあたりのこともいう。

	家の外	家の内
オロンネ	戸口より奥	炉より奥
ポウトゥンネ	戸口より外	炉より下

［鵡川汐見、新井田セイノ氏］

屋外祭壇全体をイナゥチパ inaw cipaと呼ぶ。神窓（ロルンプライ rorunpuray）は、東の方にあり、祭壇は、神窓から2メートルくらい離れている。北側（山手の方）（向かって左端）のヌサをラムヌサ ram nusaと呼び、その左手で使い古した鉢（パッチ patci）、行器（ほかい、シントコ sintoko、臼などの送りを行う。このヌサには、チェホロカケプ　イナゥ cehorkakep inaw（複数）のみを捧げる。南側（川の方）（向かって右）のヌサは、一段高くなっており、ハシナゥ hasinawと呼ぶ。このヌサには、キケパルセ　イナゥ kikeparse inawとハシナゥ hasinawという種類のイナゥを立てる。そのさらに南側で先祖供養のイチャルパを行う。炉の灰とあら糠は、どこに捨ててもよい。

［鵡川汐見、稲葉徳一氏、新井田キク氏］

戦争中、飛行機が飛んで来たとき、新井田キク氏の舅が、上座（ロッタ rotta）から刀を持ち出し、イナゥチパの前に出て、カムィノミをしたという。

［鵡川汐見、新井田キク氏］

家の奥の窓の外にはイナゥチバ inawcipa（祭壇）がある。

［鵡川汐見、新井田キク氏］

祭壇をヌサ nusaとも言う。古くなった火の神のイナゥは祭壇の下手に立てて置く。

［鵡川汐見、新井田セイノ氏］

祭壇は、神窓から2m位離れている。たいていの家にあった。ひとつづきになっていて、分かれていない。イチャルパ icarpa（先祖供養）するとき、イナゥチバ inawcipaには行かない。イトムンプライ（横壁窓）の方でイチャルパicarpaする。炉から「おき」を持って行ってやる。

使い古しのイタンキ itanki,臼などはイナゥチパ inawcipaに置いた。

灰は誰も小便をしないような畑の角あたりに捨てた。

［鵡川汐見、新井田セイノ氏、新井田キク氏］

倉（プー pu）はイナゥチパの東側の角に少し離して作る。食べ物だから人が歩いたりしないところに建てる。ヒエ・アワの穂をちぎって貯えた。鎌の代わりに貝殻に穴を開けたピパを使った。杭4本の上に建て梯子をかけた。

［鵡川汐見、新井田セイノ氏］

プーには食べ物を入れる。ヒエやアワを入れる。サカナも入れた。鼠が入らないように杭を立てて、その上に作った小屋。梯子をかけてあがる。1戸にひとつあり、広さは2間に2間くらいだ。

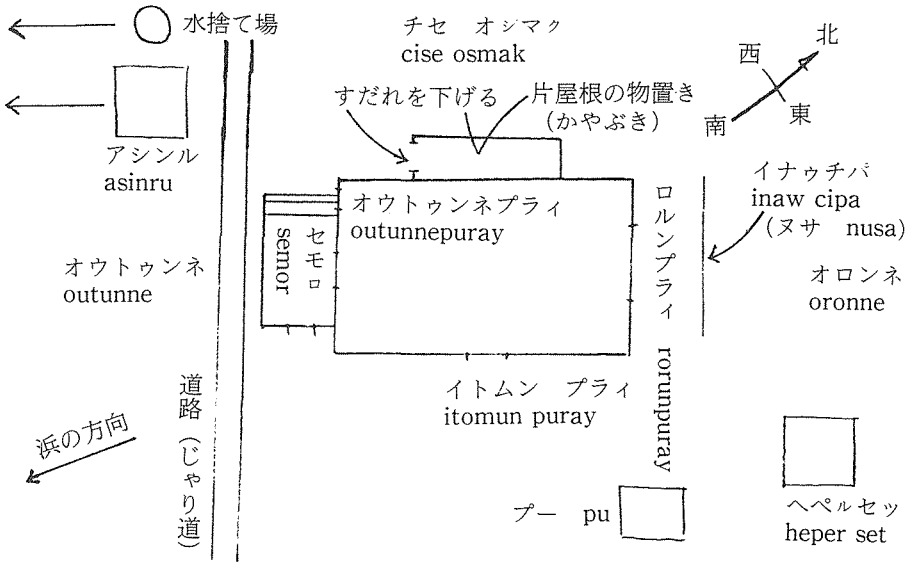
［鵡川春日、大川原絹代氏］

掘り井戸（シムプィ simpuy）の角（縁）には、イナゥキケ inawkikeを1本垂らして置く。井戸には水の神（男）がいる。

柳の枝で外の囲いを作った。昔はヨシを編んで囲いを作り、秋の霜除け、風よけとし、春になると解いた。

［鵡川汐見、新井田セイノ氏］

図14. 家の外回り



穂別の屋外構造

川に近い入口側に馬屋と物置（ポンチセ pon cise）がある。その山手側（川から離れた奥）

に便所がある。これは、男女の区別はなかった。

ロルンプライから1間くらい離れてイナゥチパ inawcipa（祭壇）がある。イナゥチパからちょっと離れた横の方に熊の檻（ぺゥレプ　チセ　pewrep　cise）があり、イナゥチパから離れた山よりの方に倉（プー pu）がある。倉には、丸太に段を刻んだ梯子（ニカラ nikar）が掛けてあった。倉は、私の家にあったが、他の家にはなかった。

馬小屋の横のポンチセで穀類（トウキビ、イナキビなど）をついた。

［穂別富内、森本八重氏］

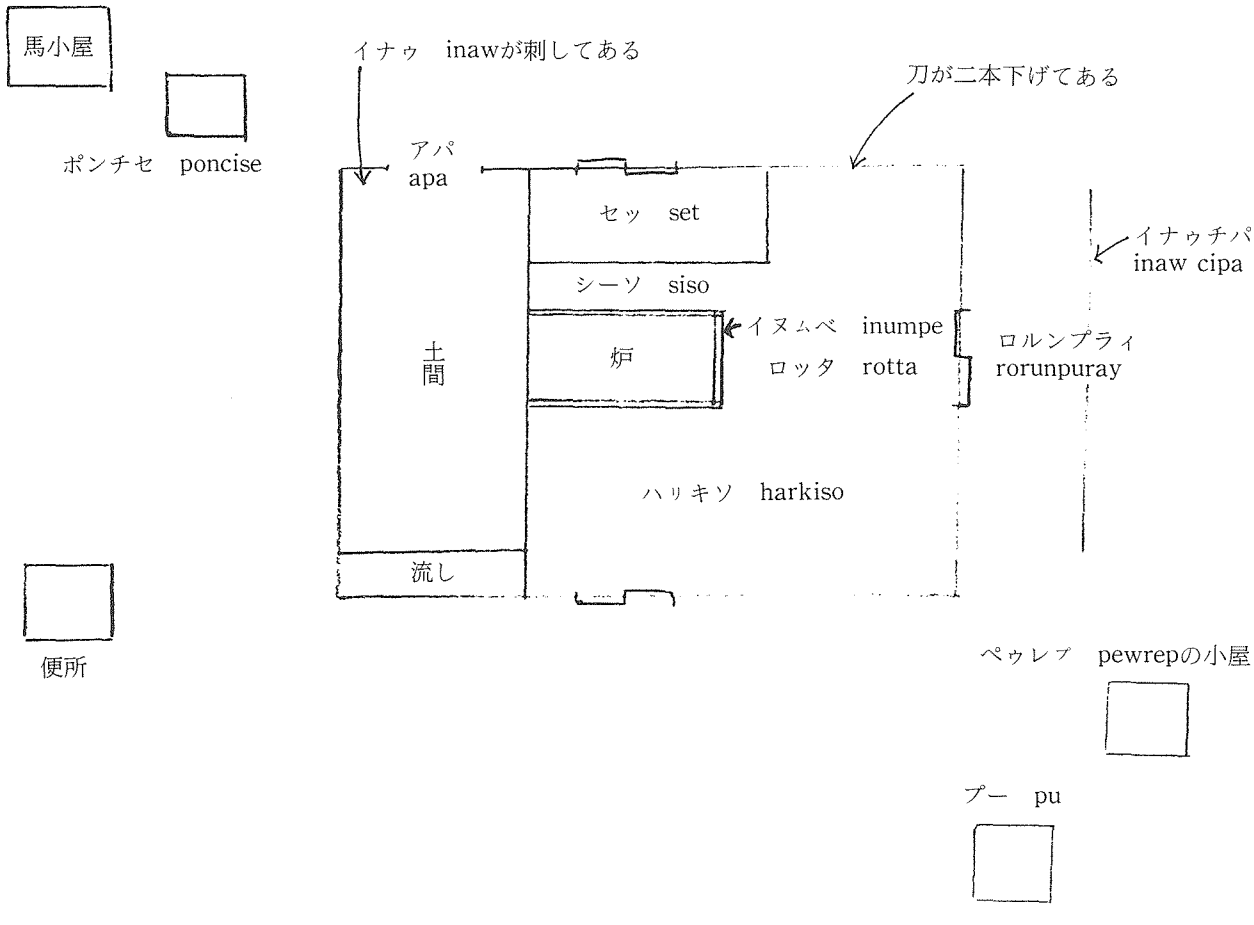



図15．穂別の屋敷構造